

パソコン壊れてしまって、暫く、読書に生きました。特に、「思考」について書かれた本を手に入っているものを中心に読んでいました。なんか、みんな同じ方向を指している記述なのに驚きました。私がオリジナルに考えたと思っていたことが、既に、1940年には語られていた。「いかにして問題をとくか」(丸善出版)ですね。

- ・「問題を理解しなければならない」
- ・「データと未知のものとの関連を見つけなければならない」「関連が直ぐに分からないときには補助問題を考えねばならない」「そうして解答の計画を立てねばならない」
- ・「計画を実行せよ」
- ・「得られた答えを検討せよ」

とか。図形で問題を捉えることも重要とか、関連問題を類推して問題を把握していくとか、いろいろな問題解法のための助言がちりばめられた本です。

私は、この本を自律で動くプログラムが解くという立場で、再議論したという立場になったのでしょうか。皆様も、この本を参考にして、「思考システム」を設計していくとよいと思います。何か発見があるかも。なにか発明の種があるかも。

例えば、関連問題を類推するところは、機械学習で、人の問題解法をコマンドシーケンスレベル間で落として、それをプロダクションシステムに再構成し直すという方法を私は提案したものでした。特許にしようと思えばできなくもないアイデアだと思うのですが。

そのほか、「ロジカル・シンキング」とか、インターネットの数学問題を解く講義録とかも読みました。だいたい、似たようなことが語られています。十指の指すところこれ真なりとか。人工知能もこれに則るべきではないでしょうか。鳥を見て飛行機を創ったが、鳥の飛行技術と飛行機の飛行技術はことなる・・・人工物は違う原理で・・・とか、有りますが、飛行機は、車輪の技術で生物と異なり、コンピュータはハードウェアがコマンドになっているところが、ニューロンと違うとかの・・・技術的違いがありますが、問題解法のスキーマはニューロンとコンピュータで同じとかということではないでしょうか。

温故知新の秋でした。

おわり